

年間第十九主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 14：22 - 33

イエスは弟子たちを強いて船に乗せ、向こう岸へ先に行かせた。その後、祈るために一人山に登りになった。夜があけるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは見て、幽霊だと言って怯え、叫び声をあげた。イエスはすぐ話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。来なさい。」ペトロは船から降りて、水の上を歩き、しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください。」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ：「信仰の薄い者よ」と言われた。二人が船に乗り込むと、風は静まった。船の中にいた人たちは：「本当に、あなたは神の子です。」と言ってイエスを拝んだ。

（二）カテキズムの響き：『カトリック教会のカテキズム』の番号#156-157、442、448-450； YOUCAT #21 - 22、74 - 75

私たちの信仰が人の理解力によく応じたしるしとなるように、天啓の外的証拠があることを望みました。例えば、キリストの奇跡、預言などは、信仰による同意が決して精神の盲目的な動きではないことを示しています。信仰は偽ることのできない言葉そのものに基づいて、神的光が与える確実性であり、自然理性の光が与える確実性よりも強いのです。

そのために、ペトロがイエスを生ける「神の子」キリストと公言したことは、人間ではなく、御父なのです。さらに、聖霊に促されて、イエスが神であるという神秘を認識しているということを表しています。「神の子」という称号のほか、福音書ではしばしば、人々は「主」とお呼びしてイエスに話しかけています。この称号は、イエスに近づいて、助けと治療を期待する人々の尊敬と信頼とを示すものでした。これは、教会の初期にできたさまざまな信仰によって宣言された神の称号であり、父である神に固有の力と誉れと栄光がイエスのものであるとの主張にほかなりません。というのも、イエスは神の身分であり、御父がイエスを死者の中から復活させ、栄光のうちに高くあげるからです。世界と歴史とに対するイエスの主権が出張されるのは、人間が自分の自由をいかなる地上の権力にも絶対に委ねてはならず、ただ父である神と主イエスキリストのみに委ねるべきであるということを意味します。だから、教会は、全人類史のかぎ、中心、目的は、主であり師であるキリストのうちに見出されることを信じています。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#25、28 「信仰」とは、神からの無償のたまものであり、人間的行為です。即ち、神によって動かされた意志の働きかけにおいて、神的真理に自由に同意する行為です。それで、人間は信仰による従順をもって、神にこたえます。

#83-84 「神のひとり子」、「主」というイエスの称号の意味。

最後の祈り：すべての人に目を注いでくださる神よ、救いを求めて集まった私たちを強めてください。神の子であり、主であるイエスキリストへの信仰によって、生活における不安や絶望の中から立ち上がり、神の言葉にこたえて歩む力で満たされますように。